

疑問の金塊

海野十三

青空文庫

尾行者 びこうしや

タバコ屋の前まで来ると、私は色硝子の輝く小窓から、チエリーを買った。

一本を口に銜くわえて、燐寸マッチの火を近づけながら窓硝子の上に注目すると、向いの洋菓子店の明るい飾窓ウインドーがうつっていた。その飾窓ウインドーの傍そばには、二人連の変な男が、肩と肩とを並べて身動きもせず、こつちをジーツと睨にらんでいるのが見えた。

「何処どこまでも、尾つけてくる気だナ」

私はムラムラと、背後うしろを振りかえつて（莫迦ばか！）と叫びたくなるのを、やっと泳こらえた。この尾行者のあるのに気がついたのは、横浜はまの銀座といわれるあの賑にぎやかな伊勢佐木町いせざきちょうで夜食やしよくを採とり、フリリと外へ出た直後のことだった。それから橋を渡り、暗い公園を脱け、この山やましたちよう下町いに入りこんで来ても、この執念しゆうねんぶか深い尾行者たちは一向退散の模様がないのである。

腕やこうどけいの夜光時計を見ると、問題の十一時にもう間もない。十五分前ではないか！

ぐずぐずしていると、折角せつかくの大事な用事に間に合わなくなつてしまう。十一時になるまでに、こいつら二人を撒まけるだろうか。これが銀座なら、どんな抜け道だつて知っているが、横浜はまと来る

と、子供時代住んでいた時とすっかり勝手が違っていた。大震だいしん災さいで建物の形が変り、妙なところに真暗な広々した空地がポツカリ明あいていたりなどして、全く勝手が違う。この形勢では尾行者たちに勝利が行ってしまいそうだ。残るは、これからすこし行つたところに、さらに暗い海岸通があるが、その辺の闇を利用して、なんとか脱走することである。

そんなことを考え考え前進してゆくうちに、向うに町角まちかどが見えた。私は大きな息を下腹一ぱいに吸いこむと、脱走は今であるとばかり、クルリと町角を曲つた。そして一目散に駈け出そうとする鼻先へ、不意に人が現あらわれた。

「オイ政、待った！」

その声には聞き覚えおぼがあつた。これはいかんと引き返そうとすると、後からまた一人が追すいが追すつた。私はとうとう挟はみぎ打ちになつてしまつた。

(しまつた！)

と思つたが、もう遅い。

「政！ 妙なところで逢うなア」

二人は予かねて顔かお馴染なじみの警視庁強ごう力りき犯はん係がかりの刑事で、折井おりい氏とやましろ山城やましろ氏とだつた。いや、顔馴染というよりも、もつと蒼蠅うるさい仲なだつたと云つた方がいい。

「……」

私はチエリーを一本抜いて、口に銜えた。

「話がある。ちよつと顔を貸して呉れ」

「話？ 話つてなんです」

「イヤ、手間は取らさん」

刑事は猫なで声を出して云つた。

「旦那方」私は真面目に云つた。「銀座の金塊きんかいは、私がやつたのじゃありませんぜ」

「ナニ……君だと云やしないよ」

刑事はくすぐ撥つたそうに苦笑した。恐らくあの有名な「銀座の金塊事件」を知らない人はあるまいが、事件というのは今から十日ほど前、銀座第一の花村貴金属店の飾り窓から、大胆にもそこに陳列してあつた九万円の金塊を奪つて逃げたという金塊強奪事きんかいごうだつじけ

件^んである。犯人は前から計画していたものらしく、^{ひとけ}人気のない早朝を選び、^{シヨール・ウインドー}飾窓に近づくと、イキナリ小脇に^{かか}抱えていたハトロ紙包^{しづつみ}の煉瓦^{れんが}をふりあげ、^{シヨール・ウインドー}飾窓目がけて投げつけた。ガチャーンと大きな音がして、硝子には^{おおあな}大孔が明いたが、すかさず手を入れて九万円の金塊を^{つか}掴むと、^{ひちよう}飛鳥のように其の場から逃げ去った。それから十日目の今日まで犯人は遂に逮捕されない。なにしろ早朝のことだったから、目撃した市民も意外に^{すくな}少ない。手懸り^{てがか}を探したが、一向に有力なのが集らない。事件は全く^{めいきゆう}迷宮に入ってしまった。警視庁は連日新聞記事の巨弾を^{くら}喰って不機嫌の度を深めていった。その際に^{ほんちよう}本庁の強力犯の二刑事が、はるばる^{はま}横浜まで遠征して来たのは、誰が考えたって、ハハア金魂事

件のためだなと気がつく。

「そう信用して下さるのなら、話はまた別の日に願いまししょう。今夜はこれで、だいぶ更ふけ過ぎていますからネ」

私は軽く突っぱねた。時計をソツと見ると、既にもう十一時之間がない。私は気が気でない。

「いやに逃げるじゃないか」と執念深い刑事は反かえつて絡からみついてきた。「ところで一つ尋たずねるが、赤ブイ仙太を見懸みかけなかつたか」

「仙太がどうかしたんですか」

「余計なことを訊きくな。貴様、仙太と何処どこで逢あつた。何時いつのことだ」

「旦那方。私はハマの仙太の番をするくらいなら、今いま時どきこんな

場所を一人で歩いちゃいませんぜ」と私はちよつと嘘をついた。

「ふざけるな。じゃあ訊くが、銀座無宿の坊ちゃんが河岸をかえて、なぜ横浜くんだりまで来ているのだ……」

坊ちゃん政——それは私にいつの間にか付けられた通り名だつた。もちろんかねて顔馴染の二刑事が覚えていゝるのも詮ないことだろう。だが云わでもその名前を呼びかけられりや、いくら此処は横浜だつて小さくなつていられるものかと、私はムツとした。だがそのムツとするのが、私の悪い病気なのだ。現に銀座を出て、単身この横浜に流れて来たのも、所詮は大きいムツとするものを感じたせいではなかつたか。

(伝統の銀座を、横浜の奴等に荒されてたまるものかい)

若い私には無体むたいにそいつが癪しやくにさわった。私は覘ねらう相手から、覘ねらうものを捲まきあげてしまわなければ、死んでも銀座には帰らないと肚はらを決めているのだ。——で、その大事の前に、顔馴染の刑事なんかと喧嘩けんかをしてはつまらないではないか。我慢をしろ！

「オイ何とか云えよ」

「黙もくつていちや、駄目だめじゃないか」

二人の刑事はジリジリと左右から肉にく迫はくしてきた。相手の眼はらんらんと輝いた。私を大きな獲物えものと見込んで、どうしても物にしようという真剣まけんさが見える。これは簡単に済まないぞ。おとなしく身を委まかして機会を待つか、それともサツと相手の足を払はらつて出るか、無気味ぶきみな沈黙しんもくが三人の息を止めた。

と、その時だった。――

キ、キヤーツ。

と、魂消たまぎえる異様な悲鳴が、突然に闇を破つて聞えた。どうやら向うの通とおらしい。途端とたんに向うに見える時計台から、ボーン、ボーンと十一時を知らせる寝ぼけたような音が響いて来た。――ああ十一時。あの時刻だ。私はドーンと胸を衝つかれたような激動げきどうを感じた。

金貨きんかを握にぎった屍体したい

「うむ、事件だぞ」

「すぐ其処だ。行くか……」

二人の刑事は顔を衝突せんばかりに近づけて、お互いの腕を掴み合った。

「直ぐ行こう」

「だが此奴をどうする？」

「うむ。さあ、どうする？」

刑事は私の処置をどうしたものかと躊躇った。

「逃げませんよ、私ア」と言下に応えた。「一緒に行つたげまし

よう」

「お前も行くか。どうかそうして呉れ！」

刑事はホツと溜息ためいきをついた。

私はわざと先頭せんとうになつて駈けだした。刑事も横合よこあいから泳ぐ

ように力走した。

真暗な、広い空地に出た。向うにポツンと二階建らしい倉庫の
ようなものが立っているが、灯あかりもない真黒な建物だ。悲鳴はその
あたりから起つたように思われる。私は前面を注視しながら走つ
た。

沈黙の倉庫の前まで来ると、向うに火の消えた街灯がいでんの柱が何
事か云いたげに立っていた。その下に、長々と横たわっている黒
い物があった。

「旦那方。あすこに、一件らしいのが見えませう」

刑事は私の方に身体を擦りよせてきた。

「うん。伸びているようだな。それッ」

三人はバラバラと、その方に近づいた。刑事の手から、懐中電灯の光がパツと流れだした。その光は直ちに、地上に伏している怪しい男の姿を捉えた。雨あがりの軟泥なんでいの路面に、青白い右腕がニューツと伸びていて、一面に黒い泥がなすりついている——
と思ったら、それは真赤な血痕けっこんだった。水色のアルパカの上衣にも、唧筒ポンプで注ぎそそかけたような血の跡が……。全くむごたらしい光景だった。

刑事は、倒れている若い男の横顔を照してみた。顔は血の気を

失つて、只太ただい眉毛まゆげと、長い鼻とが残っていた。齒を剥むき出した唇は、泥を嚙かんでいた。——と、刑事が叫んだ。

「呀あッ。……これア、赤ブイの仙太じゃないか！」

赤ブイの仙太！ 仙太といえば刑事たちが、さつき私わたしに訊きいたところの横浜はまの不良で、カンカン寅とらの一味なのだ。

「そうだ、仙太だ。すっかり顔形が違ちがっている感じだが、仙太に違ちがいない」

「誰たれが殺やつたんだらう？」

二人の刑事は、そこで顔を見合わせると、意味あり気げに、後に立たっている私の顔をジロリと睨にらんだ。

「……」

仙太だつてことは、お二人より先にこつちが知つていた。先刻さつきあの悲鳴を聞いた瞬間に、「仙太め、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ！」と口の中とこなで誦えた程だ。

「死んでゐる。……とうとう殺られたのだ。」

「全くひどい。後頭部から背中にかけて、弾丸たまを撃ちこんだナ」

「銃声は聞えなかつたが……」

「どこから撃つたのだらう」

刑事は踞うづくまつたまま、遙はるか向うの辻を透すかしてみた。そこは水みづ

底こに沈んだ麩都はいとのように、犬一匹走つていなかつた。

逃げるなら今のうちだつた。しかし私は別に逃げようとはしなかつた。

刑事たちは、折角せつかく探し求めていた横浜はまギヤングの一人、赤ブイの仙太が、遂に無惨むざんな死体となつて発見されたので、只もう残念でたまらないという風に見えた。二人は諦めあきらかねたものか、なおも屍体をいじくりまわしていた。

「おやア、なんか掌ての中に握てっているぞ」

と、突然に、折井刑事が叫んだ。

「ナニ、握てっているつて？ よし、開けてみる」

山城刑事は懐中電灯をパツと差しつけた。屍体の右手は、蓄つぼみのように固く、指を折り曲げていた。折井刑事はウンウン云いながら、それを小指の方から、一本一本外していった。

「うん、取れた。……あッ、これは……」

「なんだ、金かねじゃないか！」

掌ての中からは一枚のピカピカ光る貨幣が出てきた。

「金だ。オヤこれは金貨だ！ それも外国の金貨だ」

金貨が出てきて、刑事達は俄にわかに緊張した。銀座の金塊盗難事件以来というものは、黄金おうごんを探して歩いた二人だ。その黄金製品である金貨が、屍体となった赤ブイ仙太の掌しょうちゆう中から発見されたということは、極めて深い意味があるように思われたのだ。それにしても、それが外国金貨とは何ごとだ。

「旦那方」私は立った儘ままで云った。「金貨が落ちていますよ。ホラ、そこと、もう一つ、こつちにも……」

「ナニ、金貨が落ちている？」

「本当だ……」

刑事たちは、屍体から眼を放すと、地面を嗅ぐようにして、路面を匍いまわった。同じような、三つの金貨が拾いあげられた。一つは屍体の伸ばした右手から一尺ほど前方に、もう一つは、消えている街灯の根っこに、それから最後の一つは、倉庫のような荒れ果てた建物の直ぐ傍に……。

「沢山の金貨だ。これは一体、どういうのだろうか」

「この金貨と、仙太殺害とはどんな関係があるのだろうか。それからあの金塊事件とは……」

刑事たちは、次々に出てくる疑問を、どこから解いたものか、たいへん当惑している風だった。

「旦那方。金貨はまだまだ出てきませぬぜ」

と、私は仙太のズボンの右ポケットから、裸のままの貨幣を掴みだした。銅貨や銀貨の中に交まじって、更にピカピカ光る五枚の金貨が現れた。

「おい、余計なことをするナ」と折井刑事は一寸狼ろうばい狽の色を見せて吠どな鳴ったが「もう無いか、金貨は……」と、息せきこんだ。

「どれどれ」と代たって山城刑事が、ポケットというポケットに手をつきこんだが、その後は金貨が出てこなかった。全部で丁ちようど度十枚の金貨が出てきたわけだった。

「これアすくなくとも四五百円にはなる代しろもの物だ」と折井刑事は目を瞠みはって、「仙太の持ち物としては、たしかに異いじよう状有りだネ、

山城君」

「もつと持っていたんではないかね」と山城は眼をギロリと光らせた。「仙太のやつ、ここで強奪ごうだつに遭あつたのじゃないか。だから金貨が道こぼに滾ころれている……」

「強奪に遭つたのなら、なぜ金貨が滾れ残っているのだ。それにわれわれが駈けつけたときにも、別に金貨を探しているような人影も見えなかった」

「そりや君、仙太を殺したからさ。……いいかね。仙太は数人のギヤングに取り囲まれたのだ。前にいた奴が、仙太の握っている金貨を奪おうとした。取られまいと思つて格闘するうちに、手から金貨がバラバラと転がったのさ。手強てごわいと見て、背後にいた仲

間が、ピストルをぶつ放したというわけだ。前にいた奴は仙太を殺すつもりはなかった。仙太の仆れたのに駭おどろいて、あとの金貨は放棄して、逸いちはや早く逃げだしたのだ。見つかつちや大変というのでネ」

「これは可笑おかしい」と折井刑事は叫んだ。「第一、格闘だといつても、その証拠がないよ。入いりみだ乱れた靴の跡も無しさ。第二に、前から強きょうはく迫はくしているのに、背後うしろから撃つたのでは、前にいる同じ仲間のやつに、ピストルが当りやしないかね。僕はそんなことじゃないと思うよ」

「じゃ、どう思う？」

「僕のはこうだ。仙太のやつ、ここまで来て金貨を数えていたの

だ。ここは人通もない暗いところだけれど、向うの街の灯が微かに射さしている。ピカピカしている金貨なら数えられる。そこを遥うしろか後方から尾つけて来たやつが、ピストルをポンポンと放して……」

「ポンポンなんて聞えなかった。……尤もつとも俺は消しょうおん音おんピストルだと思おもっているが……」

「とにかく、遥うしろか後方から放はなつたのだ。見給けんえ、この弾だん痕こんを。弾たま丸まは撃うちこんだ儘ままで、外とへは抜ぬけていない。背後せきご近くで撃うてば、こんな柔なかい頸くびの辺へなら、弾たま丸まがつきぬけるだろう」

刑事てんさたちは、その筋しんへ警報けいほうすることもしないで、勝手たかな議論ぎろんを闘たたかわした。それは所しょ轄か警察署けいさつしやへ急報きゅうほうするまでに、事件じけんの性質せいしやうを

ハッキリ嘸みこんで、できるならば二人でもって手柄を立てたか
つたのである。それは刑事たちにとつて、無理もない欲望だつた
し、それに二人が本庁を離れ、はるばるこの横浜^{はま}くんだりへ入り
こんでからこつち、二人で嘗^なめあつた数々の辛^{しん}酸^{さん}が彼等を一層
野心的にしていた。

私は先程から、二人の眼を避けて、屍体の横たわっている附近
を、燐寸^{マツチ}の灯^{あかり}を便りに探^{たよ}していた。そして漸^{よう}く「ああ、これだ」
と思うものを見付けたのだつた。それは地面に明いた小さい穴だ
つた。これさえあれば、仙太殺害の謎は一部解けるといふものだ。
「ねえ、旦那方」と私は論争に夢中になっている刑事たちに呼び
かけた。

荒れ倉庫あそうこの秘密

「ナ、なんだッ」と刑事は吃驚びっくりしたらしく、私を振り返った。

「どうぞです。一つここらで手柄を立ててみる気はありませんか」

「なんだとオ。……生意気な口を利くない」

「素敵な手柄が厭いやならししようが無いが……」

刑事二人は、ちよつと顔を見合わせていたが、やがてガラリと違つた調子で、

「なんだか知らないが、聞こうじゃないか」

「聞いてやろうと仰おっしゃ有るのですかい、はッはッはッ。……まア、

それはいいとして、旦那方。私は犯人の居いどころ処を知っていますよ」

「ナニ、犯人の居処？ 犯人は誰だッ」

「犯人は誰だか知らない。だが犯人の居処だけは知っているのですよ……ホラ、ここに真暗な崩くずれ懸かかったような倉庫がありますネ。

犯人はこの中に居るのですよ」

「何故だ。どうして此の中へ逃げこんだというのだ」

「喋しゃべっている、犯人が逃げだしますよ」

「しかしわれわれは、意味もないのに動けないよ」

「じゃ簡単に云いましょう。いま仙太のポケットから出た五枚の

金貨ですがネ、あの金貨には泥がついていたのをご存知ですか」

「……」

「もう一つは、そこに錆びた五寸釘を立てて置きましたが、路面に垂直に、小さい孔が明いていますよ」

刑事たちは、目をパチクリさせて地面に踞むと、その錆びた釘を退けて、太い箸をつつこんだ程の縦穴を覗きこんだ。

「これは？」

「ピストルの弾丸が入っているのですよ。今掘りだしてみましよう」

私は釘の先で、穴をどんどん掘った。すると案の定下からニツケル色の弾丸がコロリと出て来た。

「ほほう、なるほど」刑事は駭おどろきの声を放った。「これは何故だ」

「いいですか、上を向いちや、犯人が気付きますよ。下を向いて下さい。犯人は倉庫の二階の窓から仙太を撃つたのです」

「そりや変だ。仙太は背後うしろから撃たれている」

「いいえ、傷はあれでいいのです。仙太のポケットに入っていた金貨は泥がついていたでしょう。仙太の野郎は、あの金貨を皆、

この路面から拾ったのです。だから泥がついているんです。金貨は、同じ倉庫の二階から犯人が投げたのです。仙太がそれを拾おうと思つて、地面に匍はわんばかりに踞すんだのです。いいですか。

そこを犯人は待っていたのです。丁度われわれが今こうしている此の恰かつこう好のところを、上からトントンと撃つたのですよ」

「ナニ、この恰好のところを……」

上から撃たれたと聞いて、二人の刑事は、身の危険を感じてパツと左右に飛び退いた。

「そんなに騒いじゃ、犯人に気付かれますよ」と私は追おい継すがつて云った。

「さア早く、この建物の出口を固めるのです」

「よし。おれは飛びこむ」

「だが、この屍体をどうする？」

刑事が躊ためらつているところへ、折よく、密行みっこうの警官が通りかかった。

二人は物慣れた調子で、巡回の警官を呼ぶと、屍体の警戒やら、

警察署への通報などを頼んだ。警官はいく度も肯うなずいていたが、刑事たちが、

「じゃ、願いますよ」

と肩を叩くと、佩はいけん剣を握にぎって忍しのび足あしに元来た道へひつかえしていった。

「さあ、これでいい。……じゃア、飛びこむのだ」

私たち三人は、抜き足さし足で、この建物の周囲をグルリと廻まわった。表の大戸おおどは、埃ほこりがこびりついていて、動く様子もない。裏手に小さい扉がついていて、敷居しきいに生なまなま々々しい泥靴の跡がついている。これを引張ひつたが、明かない。

「いいから、内側はみへ外はずして見ろ！」

経験がいかなる場合も、鮮あぎやかに物を云った。戸の端はしがゴトリと内側へ外れた。それに力を得て、グングンお圧すと、苦もなく入口が開いた。——内は真暗だ。

懐中電灯の光が動いた。階下には、大きな古樽ふるだるがゴロゴロ転がっている。その向うには一斗と以上も入りそうなそれも大きな硝ガ子壘ラスびんが並んでいる。ひどい蜘蛛くもの巣いたが到るところに掛っている。埃ちりっぽい上に、なんだか鼻をつくような酸っぱい匂においがする。しかし犯人らしい人影は見えない。

「じゃあ、おれは入って見る」と折井刑事は低声こごえで云った。「山城君はここで番をして居給え」

「うん」

「私もお供しましょう」と申し出た。

「そうか。……だが危いぞ。おれはピストルを持っているけれど……」

「なーに、平気ですよ」

折井刑事と私とは、一歩一歩用心しながら建物の中に入った。

樽たるの間を探してみたが、何も居ない。——刑事は頤あごをしゃくつた。その方角に梯子はしご段だんが斜めに掛っていた。

（階段をのぼるのだな）

と私は思った。そのとき突然に、刑事の懐中電灯が消えた。

階段を一步一步、息を殺し、足音を忍んで上っていった。いまにも何処かの隅から、ピストルが轟ごう然ぜんと鳴りひびきそうだった。

そのとき、折井刑事が私の腕をひっぱった。そして耳の傍に、
やつと聞きとれる位の声で囁いた。

「二階に手が届くようになったから、一度懐中電灯をつけて見る。
ピストルの弾丸が飛んでくるかも知れないが動いちやいけない。
その後で懐中電灯を消すから、その隙に階上へとびあがるのだ。
わかつたかネ」

私は低声で「判りました」と返事した。私を縛ろうとした刑事
と、同じ味方となって相扶け相扶けられながら殺人鬼に迫つ
てゆくのだ。なんと世の中は面白いことよ。

折井刑事が、また一段上にのぼった。するとサツと一閃、懐
中電灯が二階の天井を照した。灯は微かに慄えながら、天井を滑

り下りると、壁を照らした。それから四囲の壁を、グルグルと廻った。——しかし予期した銃声は一向鳴らない。途端にパツと灯が消えた。

(今だ!)

私は階上に駆け上った。その拍子に、いやというほど、グラグラするものに身体をぶつつけた。見当を違えて、樽にぶつつかったものらしい。

十秒、十五秒……。

パツと懐中電灯が点^{とも}つた。しかし何も音がしない。

(さては、自分の思いちがいだったのか)

私はイライラしてきた。

「さあ、こんどは君がこいつを持つて」と刑事は私に懐中電灯を握らせ「先へ立って、この部屋を廻つて呉れ。危険だからネ」そういつて彼はピストルで敵を撃つ真似をした。

私は電灯を静かに横へ動かした。部屋には階下同様、大きな硝子壘だの、樽だのが並んでいた。しかし階下には無かつた変な器械がいちぐう一隅を占領していた。それは古い化学工業のげんしよ原書にあるようなレトルトだの、たいさんせい耐酸性の甕かめだの、奇妙に曲げられた古いガラスかん硝子管だのが、だいしやうこうてい大小高低を異にしたかだい架台にとりつけられていたのだつた。

(さてはこの建物は、きやうさんこうじやう強酸工場と倉庫とを兼ねているんだな)

と私は気がついた。これは横浜へ明治年間に来た西洋人が、その頃日本に珍らしくて且つ高価だった硫酸や硝酸などを生産して儲けたことがあるが、それに刺戟せられて、雨後の筍のように出来た強酸工場の名残なのだ。恐らく震災で一度潰れたのを、また復活させてみたが、思わしくないので、そのまま蜘蛛の棲家に委ねてしまったものだろう。それにしても……。

と、突然に、後方にガタンと樽の倒れる音がした。ハツと振りかえる間も遅く、飛び出した黒い影が飛鳥のように階段を駆け下りた。

「待てッ」

折井刑事は叫び声をあげるが早いか、怪影を追跡して、階段

の下り口へ突進した。そして転がるように、駈け下りた。

激しい叫喚きょうかんと物の壊れる音とがゴツチャになって、階下か

ら響いてきた。出口にいた城山刑事に遮さえぎられて、怪漢は逃げ場を

失い、そこで三人入いりみだ乱れての争闘が始まっているのであろう。

しかし私は、懐中電灯を持ったまま、じつと階上の部屋に立ち

尽くしていた。目の前にある何に使うとも知れない化学装置が、ひ

どく私の心を捉とらえたのだった。それは奇妙な装置でもあつたが、

私の興味を惹ひいたのは、それが奇妙なことよりも、むしろ生々なまなま

しい感じがしたからだつた。室内は荒れ果て、樽は真白な埃にま

みれ、天井には大きい蜘蛛の巣が懸かかつていて、古めかしさの

中に、その化学装置ばかりは、埃のホの字も附着していなかつた

からであった。

私は事件の謎が、正しくこの場に隠されていることを感づいた。
「よしッ。この秘密を解かずに置くものかッ」私は腕ぐみをした
まま、石のように、何時までも立ち尽したのだった。

怪しき取り引き

その次の日の夕方、私は同じ伊勢佐木町で、素晴らしい晩餐
を執っていた。前日と違っているところは、連れが一人あること

だった。壮平爺さんそうへいじいという頗る風采すこぶのあがらぬ老人が、私の客だった。

「ほんに政どん」と壮平爺さんは眼をシヨボシヨボさせて云った。「あんたに巡りあわなければ、今頃わしや首をくくつていたかも知れん。あのカンカン寅が、人殺しの嫌疑けんぎでお上に捕かみつたと聞いたときは、どうしてわしや、こうも運が悪いのかと、力もなにも一度に抜けてしまつてのう」

カンカン寅というのは例の仙太の親分に当る男で、昨夜ゆうべあの海岸通の古建物で、折井山城の二刑事に捕つた怪漢のことだった。彼は始め階上に潜ひそんでいたが、私たちをうまくやり過ごしたところで階段を下りて逃げだしたが、出口に頑張がんばつていた山城刑事に

退路を絶たれ、遼ろぐところを追いつがった折井刑事に組みつかれ、そこで大乱闘の結果、とうとう縛についたというわけだった。二人の刑事は、案の定大手柄を立てたことになった。その悦びのあまり、一旦不審を掛けた私だったが、何事もなく離してくれたのだった。

しかし捕えたカンカン寅というギャングの顔役は、当局の訊問に対して、思うような自白をしなかった。彼の手先である赤ブイの仙太殺しの一件を追求しても、首を横に振るばかりか、例の証拠をさしつけても一向恐れ入らなかつた。かねがね手強い悪党だとは考えていたが、あまりにもひどく否定しつづけるので、係官もすこし疑問を持つようになったと、きょう折井刑事が不満

そうに語ったことだった。

それに引きかえ、カンカン寅捕縛ほぼくと共に、明かな失望を抱いたのは、この壮平爺さんだった。彼はあの古い建物の持ち主だった。彼は本牧ほんもくで働いている彼の一人娘清子きよこを除いては、この古い建物が彼の唯一の財産だった。ところで壮平爺さんは、目下大変な財政的ピンチに臨のぞんでいるのだった。それは先年せんねん、ついウカウカと高利貸こうりがしの証文しょうもんに連帯れんたいの判を押したところ、その借主がポツクリ死んでしまつて、そのために気の毒にも明日が期限の一千円の調達ちようたつに老の身おいを細らせているのだった。下手をすれば、娘の清子を棲すみかえさせて、更に莫大な借金を愛児の上に掛けさせるか、それとも首をくくつて死ぬより仕方がなかったのだ

った。詮せん方かたなく、物は相談と思い、カンカン寅の許を訪ね、あのボロボロの建物を心ばかりの抵てい当とうということにして（あれでは二百円も貸すまいと云われた）、一千円の借金を申込んだ。

寅は何と思ったか、それを二つ返事で承知して、壮平爺さんを帰らせた。それは今から一月前のことだった。しかしカンカン寅は一向に金の方は渡す様子がない。それで催さい促そくにゆくと、期限の前日までに渡してやろうという話だった。ところが明日が約束の日という昨夜になって、カンカン寅が突然警察へ監かん禁きんされたしまったので、爺さんは失しっ心しんせんばかりに駭おどろいた。顔色を変えてカンカン寅の留守宅へ行つて、いままでの事情を話すと共に、この際は非ゆうに融ゆう通ずうを頼むと歎たん願がんをした。しかし留守を預る人

達は、老人の話を鼻であしらつて追いかえした。親分がこんなになつていて、そんなことが聞かれると思ふか、いい年をしやがつてという挨拶あいさつだった。

心臓が停まるほど驚いた壮平爺さんは、泣く泣く我が家へ歸つていった。路々みちみち、この上は娘に事情を云つて新しい借金を負おわせるか、さもなければ首をくくろうかといずれにしても悲壯な肚はらを決めかけていたところへ、私が背後うしろから声をかけたのだつた。爺さんとは、私が少年時代からの知り合いの仲だった。——と、まアこういう訳だった。

「じゃあ爺さん。私がカンカン寅に代つて、あれを千円で譲ゆずりうけようと思ふが、どうだネ」

と、事情を訊いた私は、相談を持ちかけた。

「えッ。あんたが、代つて千円を」爺さんは目を瞠みはつて云つた。

「文句がなければ、金はいまでも渡そう」

「そうけえ。濟まないが、そうして貰うと……」

「ホラ、千円だア。調べてみな」

私は人氣ひとけのない室へやに安心して、千円の紙幣束さつたばを壮平に手渡した。

その千円は、実を云えば銀座を出るとき、仲間から餞せんべつ別に贈られた云わば友達ともだちの血や肉のように尊とうとい金であつたけれど、老人はワナワナ慄ふるえる手に、それを受取つた。そして指先に唾つばをつけて、一枚一枚紙幣を数えていった。

「確かに千両。わしゃ、お礼の言葉がない」

「お礼は云うにや及ばないよ。それよか爺さん、ちよつと云つて置くことがある」

「へーい」

「私が金を出したことは、誰にも云つちやならないよ。しかしそれがためにあの建物がまだ爺さんの手にあるのだと思つて、買いたいという奴が出て来たら、あの建物はいつでも返してやるから、直ぐ私のところへ相談に来なさい。いいかい爺さん」

「へーい、御親切に。だがあれを買いだいななんて物ずきは、これから先、出て来つこないよ、あんたにや気の毒だけれど……」

「はッはッはッ」

私は壮平爺さんを外に送りだした。老人のイソイソとした姿が、

町角に隠れてしまうと、私は船会社ふながいしやと、東京から連れてきた身内の者はまとに電話を掛けた。それから外へ飛び出した。それは私が横浜はまに来た仕事の片かたをつけるためだった。

どんな仕事？

ギヤング躍おどる

その夜はたいへん遅くなって、宿に帰った。私はなんだか身体中がムズムズするほど嬉しくなしんって、寝台しんだいについたけれど、一

向睡ねむれそうもなかつた。とうとう給仕を起して、シャンパンを冷やして持つて来させると、独酌どくしゃくでグイグイひっかけた。しかしその夜はなかなか酔いが廻らなかつた。

その代り、いろいろの人の顔が浮んで消え、消えた後からまた浮びあがつた。——銀座の花村貴金属店シヨウ・ウインドーの飾窓をガチャーンと毀こわす覆面の怪漢が浮ぶ。九万円の金塊きんかいを小脇こわきに抱かかえて走つてゆくうちに、覆面がパリりと落ちて、その上から現れたのは赤ブイの仙太の赤づらだ。すると横合よこあひから、蛇へびのような眼を持ったカンカン寅がヒョククリ顔を出す。とたんに仙太の顔がキューツと苦悶もんに歪ゆがむ。カンカン寅の唇に、薄笑はくせういが浮かんで、手に持ったピストルからスーツと白煙はくえんが匍はい出してくる。二人の刑事の顔、壮

平爺さんの嬉しそうな顔、そして幼な馴染の清子の無邪気な顔、
——それが見る見る媚かな本牧の女の顔に変わる。

「明日になったら、清子に一度逢つてくれるかな。清子も逢いた
いと云つているつて、壮平爺さんが云つたが……。莫迦莫迦。手
前はなんて唐変木なんだろう。自惚が強すぎるぜ。まだ仕事
も一人前に出来ないのに……」

自嘲したり、自惚たりしているうちに、ようやく陶然と酔
つてきた。——そして、いつの間にかグツスリ睡つたものらしい。
コツ、コツ、コツ。

慌ただしいノックの音だ。それで目が醒めた。気がついてみると、
と、空気窓からは明るい日の光がさしこんでいた。時計を見ると、

午前九時。

「なんだア」

まだ早いのに……と、私は不満だった。

「朝っぱらから伺いうかがやして……」

と、扉ドアの向うでしきりに謝っているらしいのは、どうやら壮平爺さんの声だった。私は思わず、ギクンとした。

扉ドアを開いてやると、転がるように壮平爺さんが入ってきた。顔色は真ま青あおだ。不眠か興奮のせいか、瞼まぶたが腫はれあがっている。

「早いもので、ボーイさんも相手にせず、電話も通じて呉れないんで……」

と老人は恐きょう縮しゆくした。

「なんだネ、こんな朝っぱらから」

私はチエリーをとって口に銜くわえた。

「イヤ政どん、今日は早朝から、わしも大騒ぎさ。アノ、カンカン寅の一家が、わしのところへ押し寄せてきやがった」

「ほうほう」私は紫の煙を、天井高く吹きあげた。美しい煙の輪がクルクル廻る。

「昨日はてんで相手にしなかったあの海岸通の建物を買うというのさ」

「うん、うん」

「わしは腹が立って、手厳てきびしく跳ねつけてやったよ。あれはもう売っちまった。もう遅いよとナ。すると、それはいかん、是非こ

つちへ売れという。それは駄目だと、尚も突つばねると、向うは躍やつき気さ。こつちへ買い戻さねば親分に済まねえ。売らないというのなら手前は生かしちや置けねえと脅おどしやがる。それがどうも本気らしいので、政どんの昨夜ゆうべの話もあり、じゃあ一寸相談してくるといつてその場は納めたが……」と壮平は顔を慄ふるわせた。

「——じゃあ、売つておやりよ」

「えッ」

「売つてやるが、すこし高いがいいかと云うんだ。五千円なら売るが、一文も引けないと啖たんか呵を切るんだ」

「そいつはどうも」

「云うのが厭なら、私はあの建物を手離さないよ。……そいつは

冗談だが、こいつは儲け話なんだ。相手は屹度買うよ。彼奴等はきつと今朝がた、留置場のカンカン寅と連絡をしたのだ。そのとき買つとかなければ手前たちと縁を切るぞぐらいなことを云つて脅したんだよ。カンカン寅から出た話なら、五千元にはきつと買う。やつてごらんよ」

壮平爺さんは、私が心を翻さないと見て、諦めて帰りかけた。

「ああ、ちよつと」と私は呼びとめ、「いいかい爺さん。五千元を掴んだら、直ぐ横浜を出発んだ。娘さんも連れて行くんだぜ」

「どうして？」

「もう此上横浜に居たつて、面白いことは降つて来やしないよ。お前たちは苦しくなる一方だ。いい加減に見切をつけて、横浜を

オサラバにするんだ。ぐずぐずしていりや、カンカン寅の一味にひどい目に遭わされるぞ」

「……」

「そしてその五千円だが、それも爺さんにあげるよ。小さいときいろいろと可愛がって貰ったお礼にネ」

「五千円を？」と壮平老人は目を丸くして「五千円よりもその言葉の方が嬉しいが、一体わし達はどこへ行けばいいのかネ。こうなると、わしはお前のところから遠く離れるのが心細くなるよ」

老人は悦びよろこのあとで、またりようがん両眼をうるませた。

「満洲へゆくんだ。丁度ちようど幸い、今夜十一時に横浜はまを出る貨物船清見丸きよみまるというのがある。その船長は銀座生れで、親しい先輩さ。

そいつに話して置くから、今夜のうちに港を離れるんだ」

「満洲かい。……それもよかろう」

「じや娘さんに話をして、直ぐに仕度にかかるんだ。外ほかには誰にも話しちや駄目だぜ」

「そりや大丈夫だ」と老人は肯うなずいて「じや、万事お前さんの云うとおりにしよう。それでは順序として、まず五千円の商談をして来よう」

「ちよつと待った」と私は老人を呼び止めた。「あの建物の取引だが、今夜の十時にするといつて呉れ」

「莫迦ばかに遅いじやないかね。いま直ぐじや拙ますいのかい」

「ちよつと拙いなのさ。というのは、あれを私が買つてから、中身なかみ

を少し搬はこび出してしまったのよ、そいつを元通りに返すとすると、
どうしても午後十時になる」

「へえ、中身をネ」老人は訝いぶかしそうに呟つぶやいた。「中身というと、
あの酸の入っている……」

「そうさ、酸を或る所へ持つていったのさ。買ったからにや、宝
ものは私のものだからネ」

「そういえばカンカン寅の一味も、あの中身をソックリつけてと
云つていたよ。こいつは変だぞ。……オイ政どん、噂に聞くと、
あのカンカン寅が銀座の金塊を盗みだしたというが、お前は昨日ゆうべ、
あの建物にカンカン寅が隠してあった九万円の金塊を探しだして、
搬はこびだしたんだナ」

「金塊は無かったよ」と私は朗かに云った。ほがら。「金塊どころか、金の伸棒のべぼうも入っていないなかったことは、警官たちが一々検査して認めているよ」

「ほほう、そのとき警官が立ち会ったのかい」

「立ち会ったともさ。何しろその中身はいま警察へ行っているんだぜ」

「へへえ、中身が警察へネ。わしにや判らない。一体その酸をどうしようというので……」

「いまに号外が出る。そのとき訳が判るよ」

横浜よ、さらば

その夜更けて、私は貨物船清見丸へ壮平親子を見送りにいった。
甲板に堆高く積まれたロープの蔭から私たちは美しい港の灯
を見つめていた。

「横浜を離れるとなると、やっぱり淋しいわ」
と清子が丸めたハンカチを鼻に当てた。

「清子、贅沢をいっっちゃ罰が当るよ」と壮平老人が云った。
「政どんが来てくれなくちや、お互に今頃は屍骸になつて転がっ
ていたかも知れない」

「でも……」

「ところが屍骸にならないばかりか、借金を返した上に、五千両の金まである。その上、言い分があつてたまるか」

「感謝しているわ。あたしたちはいろいろと儲けもうものをしていのに、政ちゃんは損ばかりしているのネ」

「それでもないよ」と私は笑つた。

「どうだ政どん」と壮平老人はこのとき真顔まがおになつて云つた。

「この辺で、一件の話を聞かせてくれてもいいじゃないか。あの倉庫から搬び出した中身のこと、それからお前が横浜はまへ流れてきた訳など」

「じゃ土産咄みやげばなしに、言つて聞かせようか」

私はそこで、一件の要領をかいつまんで話をした。

——私は壮平老人から倉庫を一千円で買ったがあれには大きな自信があつたのだつた。あの夜、秘密に倉庫から警察へと搬んだ酸は、大きな硝子壘ガラスびんに入つて全部で二十五個だつた。それは見たところ、黄金おうごんの形は一向に無くて、澄明ちようめいな液体に過ぎなかつたが、しかし本当は九万円の黄金が、この液体の中に溶けこんでいるのだつた。それは何故か？

王水おうすいという強酸きようさんがあることを、人々は知つていゝのである。それは硝酸しょうさんと塩酸えんさんとを混ぜた混合酸であるが、この酸に黄金を漬つけると始めて黄金は形が崩れくず、やがて、全く形を失つて液の中に溶とけ去る。それでこの強酸に王水おうすいという貴とうとい名前が附

けられている。――

黄金を王水に溶かしたのは私ではない。それは今、殺人罪で警察にかんきん監禁せられているカンカン寅の仕事だ。彼奴はそれを、あの海岸通の古い建物の中で仕し遂とげたのだ。九万円の金塊は、手下の赤ブイの仙太を使って、銀座の花村貴金属商から強ごう奪だつさせた。仙太が逃げ帰つてくると、煉れん瓦がだい大の其の金塊は巻き上げ、仙太の身柄は身内の外に隠した。しかし仙太がいずれその内に喋しゃべるのを恐れたカンカン寅は、残ざん虐ぎやくにも仙太に報ほう酬しゆうをやるといつて呼び出した。

仙太は何も知らず、云いつけ通り海岸通の古建物の前へ来て口笛を吹いたのだらう。カンカン寅は、仙太と一室に逢うのは仙太

のために危険だと巧いことを云い、あの建物の二階から、報酬の金貨を投げ与えたのだ。仙太が地上に散らばった金貨を拾おうとかが、
踊んだところを、二階からカンカン寅が消音ピストルを乱射して殺してしまつたのだつた。仙太の行動に不審を持つていた私は、あの会合の時間も場所も知つていたのだつた。とにかく気の毒な仙太だ。

笑止千萬なのは、カンカン寅だ。あの古い建物を壮平爺さんの手から買いとつたと悦んでるだろうが、九万円の液体黄金の無くなつたことは夢にも知らないのだ。今夜私が搬び入れて置いた中身の酸は、分量こそ同じ二十五壘だが、東京から買った純粹の酸でしかない。カンカン寅の奴、後でそれを分析して

みて、一匁もんめの黄金きんも出てこないときには、どんな顔をする事だろうか。失望と憤怒ふんぬに燃える彼奴あいつの顔が見えるようだ。……と話をしてくると、壮平老人は、私の言葉を遮さえぎった。

「それはいいが、その九万円の黄金液はどう始末したのかい」

「警視庁へ引き渡したよ」

「どうだかね。九万円じゃないか」いかにも惜しい儲け物もうだのにという顔をした。

「本当に渡したよ。私は金が欲しいわけでこの仕事をやったんじゃない。目的は銀座の繩張なわばりへ切りこんできたカンカン寅の一味ひにあわと泡あわふかせたかっただけさ」

「それじゃ警視庁は大悦びだろう」

「うん。——」

大手柄と判つたときの、折井山城の二刑事の嬉しそうな笑顔が再び目の前に見える。二人は意気揚々と本庁へ引上げていったことだろう。

そのとき、解纜かいらんを知らせる銅鑼どらの音が、船首の方から響いてきた。いよいよお別れだ。私は帽子に手をかけた。

「お父さん。——」

いままで黙って聞いていた清子が、突然顔をあげた。

「なんだ、清子」

「あたしは船を下りるわよ」

そういうが早いのか、清子はトランクを両手で持ち上げた。

「なにを云うんだ。横浜はまにいちや、生命がない。カンカン寅の一味は張り子の人形じゃないぞ」

「生命が危いくらい、あたし知っているわ。でも……でも、あたし死んでもいいのよ、政ちゃんの傍そばに少しでも永く居られるなら……」

清子は憑つかれたような眸ひとみで、私の方に顔を向けた。

壮平は気が転てん倒とうしてしまつて、一語も発することができないで居る。銅鑼は船内を一巡じゆんして、また元の船首で鳴っていた。出発はもう直ぐだ。

肚はらを決めた私は、イキナリ清子の手からトランクを取った。

「まあ嬉しい。あたし下りてもいいの」

「いや、いけない」

私は手に持ったトランクをソツと下に下ろした。清子は顔を両手の中に埋めた。私はトランクの上に静かに腰を下ろした。そしていつまでも動かなかつた。銅鑼はもう鳴りやんで、清見丸は静かに動き出した。

満洲へ、満洲へ……。銀座に別れて満洲へ……。

それもまた、いいだろう！

折から、埠頭の方から、リリリリと号外売りの鈴の音が聞えてきた。私の眼底がんでいにはその号外の上に組まれた初号活字しよごうかつじがアリアリと見えるようだ。——そのとき私は耳許みみもとに、魂をゆするよ
うな熱い息づかいが近よってくるのを感じたのだった。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三二書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「キング」

1934（昭和9）年6月号

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2005年5月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

疑問の金塊

海野十三

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>